

氏 名	中 井 正 なか い ただし
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	論 医 博 第 3 8 号
学位授与の日付	昭 和 37 年 6 月 19 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	感光色素とアレルギー —Lumin—または Platonin が Arthus 現象に及ぼす 影響について—
論文調査委員	(主 査) 教 授 鈴 江 懐 教 授 田 部 井 和 教 授 岡 本 耕 造

論 文 内 容 の 要 旨

卵白アルブミンによって家兎を感作し、抗体価の充分上昇した後、同一抗原による皮膚の Arthus 現象を観察した。そうして感光色素ルミンまたはプラトニンを附加投与する時、Arthus 現象の発現にどのような影響が現われるかを観察したのである。その結果、次のような成績を得た。

まず、感光色素ルミンまたはプラトニンの添加投与は明らかに抗体価の上昇を促進する。すなわち肉眼的観察上、感光色素ルミンまたはプラトニンの附加投与は Arthus 現象の発現を著明に促進し、またその終熄を早くする。そうして Arthus 現象による組織障害を質的に強烈ならしめる反面、量的にはその広袤を狭小ならしめ限局的ならしめるのをその特徴とする。

病理組織学的検索の結果も、Arthus 現象の病像は全く肉眼的観察所見とよく相照応するところのものがあ、感光色素の附加投与により Arthus 現象の発来に基づく組織的病像は一般的に早く現われ、強く認められ速やかに終末に至る。すなわち、感光色素添加投与群において浮腫、膨化は早く現われるが範囲が狭く、出血壊死は対照よりも速く現われ、限局的傾向が著明である。ところがこれにひき続いて起こる壊死巣の凝縮乾燥による痂皮形成、およびその分離、脱落したがって上皮の周囲よりの再生伸長による表皮の修覆補綴、ならびに深層における肉芽組織増生などは感光色素添加投与群において早く完了する。

これを端的に言えば、感光色素の投与は Arthus 現象の発来を増強促進するが、同時にこれを局在せしめる傾向が著しく、さらにその結果として発来する組織障害の回復、創傷治癒を促進するということになる。

以上を要するに、感光色素は Arthus 現象の発来を初期において促進増強せしめ、これを限局化する傾向が強く、さらに末期に近づくにつれ痂皮形成、肉芽形成を促進し病巣の分画、離脱を速やかならしめるということになる。そこで感光色素が Arthus 現象を強烈にするということと、その終熄を促進するということとは一見矛盾撞着するごとくであるが、実はこれは決してそうではない。慎重に Arthus 現象なるものの生物学的意義を吟味検討するならば、これは二にして一なる感光色素の作用を包括しているものであ

る。すなわち、われわれは Arthus 現象なるものを分析的に二つに分けて考えなければならないのである。それは、アレルギーそのもの、抗元抗体反応としての Arthus 現象と、今一つはその結果生じた組織障害の治癒という事柄である。感光色素はその二者いずれをも促進しているのであって、初期には組織障害を助成し、後期には組織修復を推進するという一見矛盾したかに思われる現象が天衣無縫に取り行なわれているところに無限の面白さがある。ここに至ってわれわれはいまさらながら『アレルギーなるものは局処を犠牲にして全体を救うという生物学的意義を持つ。』と主張提言した Rössle の古典的命題をしみじみと思い出さざるを得ないのである。感光色素は正にこのような意味において個体の防衛力を増強せしめているものであると言わねばならぬ。

論文審査の結果の要旨

本論文は卵白アルブミンによって感作せられた家兎が、同一抗元によって皮膚に Arthus 現象を惹起せしめられた場合、これに感光色素 Lumin または Platonin がいかなる影響をおよぼすものであるかを実験的に研究観察したのである。

従来感光色素が Arthus 現象におよぼす影響についての研究は一、二試みられているが、これを促進増強する面と、これを軽減抑制する面とが微妙にからみあって、現象的に矛盾撞着する点が多いように考えられていたのであるが、著者はこれを文献的に考察し、理論的に勘案し、分析的に理解し、たんに感光色素が Arthus 現象におよぼす影響を皮相的に解釈するだけでなく、広くこれを基盤としてアレルギーなるものの本態把握に重要な貢献をしたのである。

すなわち感光色素 Lumin または Platonin の添加投与は明らかに抗体価の上昇を促進し、また Arthus 現象の発現をもしたがって促進するが、その終熄は早くなる。そうして Arthus 現象による病変——組織障害は質的に強烈ならしめられるが、反面質的にはその広袤を狭小ならしめ限局的ならしめるのを特徴とする。病理組織的検索の結果も、さらに Phosphatase などの組織化学的所見もこれらの成績を裏書している。

これを端的に言うならば、感光色素がアレルギーにおよぼす影響を考察するにあたっては、アレルギーそのもの、抗元抗体反応としての Arthus 現象と、今一つその結果として生じた組織障害の治癒という、これら二つの事柄に分析して観察しなければならないということを示唆しているのであって、アレルギーの本態解明に重要な指標を与えているものと言わなければならない。

以上のごとくにして、本論文は医学博士の学位論文として十分なる価値あるものと認める。